

P15

若年者顎関節症患者における下顎頭形態と 関節円板前方転位の関係

○長谷川大子、重田浩樹、吉原俊博*、
松本祐子、早崎治明、山崎要一

鹿児島大学 院医歯 小児歯科

* 北海道大学 院・歯 小児歯科

【目的】若年者の顎関節症患者において、関節円板の前方転位は多く認められる病態であり、顎関節症状と強く関係するといわれている。今回、顎関節症の初発時期と考えられる若年者を対象に顎関節部 MRI 検査を行い、下顎頭形態と関節円板前方転位との関係について検討した。

【方法】鹿児島大学病院小児歯科を受診した若年者顎関節症患者 119 名（男子 23 名、女子 96 名）の 238 関節を対象とした。

診断時に撮影された前頭断と水平断の MRI 画像を使用し、下顎頭の形態評価を行った。前頭断では下顎頭長軸角と下顎頭外周の計測を行い、水平断では下顎頭長軸角と下顎頭の外側極から内側極までの下顎頭上縁の形態を計測した。

対象関節を関節円板の前方転位を認めない群（Normal 群）と復位を伴う関節円板前方転位群（ADD-W 群）、復位を伴わない関節円板前方転位群（ADD-WO 群）に分け、3 群間の下顎頭形態を比較検討した。

【結果】前頭断において下顎頭長軸角は Normal 群と ADD-WO 群に有意に差が認められた ($p < 0.05$)。また、水平断において下顎頭長軸角に差は認められなかったものの、下顎頭の面積は、Normal 群と ADD-WO 群、ADD-W 群と ADD-WO 群で有意に差が認められた ($p < 0.01$)。

【考察】以上の結果から、若年者顎関節症患者において下顎頭の形態は関節円板前方転位に関与していることが示唆された。

P16

歯学部新入生の歯の色に対する認識

○細矢由美子、藤原 卓
長大・院・小児歯

＜目的＞：演者は、入学直後の1年生に対する早期体験実習中で、“歯の色と測色”を担当し、10数名ずつの4グループに対して50分ずつの実習を行っている。今回は、平成20年と21年の受講者でアンケート用紙を提出した93名（男性：42名、女性：51名）の調査結果を報告する。

＜方法＞：Ⅰ. 講義項目；歯の構造、歯の色の特徴、歯の色の比較・お呼び測色法。Ⅱ. 実習項目；(2人1組で) 1). シェードガイド (Vitapan 3D Master、Vitapan Classical) を用いた上顎中切歯のシェード選出。2). 高速分光光度計による測色。3). 歯と選出シェード間の色差の算出と色彩管理図の作成。4). 1)～3) の考察。

Ⅲ. アンケート調査項目；自分の歯の色について、歯の色をきれいにする方法、美白歯磨剤、歯のシェード選びと機械による測色。

＜結果と考察＞：1). 自分の歯の色については、興味がある者が 82.9%（男性：71.4%、女性：92.2%）であったが、歯の色に自信がない者が 75.3%（男性：73.8%、女性：76.5%）を占め、歯の色をきれいになりたいと思う者は 83.9%（男性：78.6%、女性：88.2%）と高率であった。2). きれいな歯の条件は、歯並びがよい (41.2%)、汚れがついていない (36.8%)、歯の色が白い (14.7%)、形がよい (5.9%) であった。3). 歯の色をきれいに保つために日頃何か注意をしていると答えた者は 19.4% のみであった。4). 美白歯磨剤は使った事がない者が 82.8% を占め、その効果については、効果がある (24.7%)、効果はない (5.4%)、どちらとも言えない (57%) であった。5). シェード選びを体験する事により自分の歯の色に対する見方が変わったと答えた者が 52.7% いた。シェード選びは難しく (81.7%)、自分の歯の色は普段自分が思っていた色よりも白かった (30.1%)、黄色かった (22.6%)、同じであった (41.9%)。6). 歯の色を機械で計測する方法は有効 (87.1%) であり、機械による測色に興味がある (84.6%) と答えた者が多く、光学器械やコンピュータを使用して測色する方法への感心の高さが伺えた。

シェード選びや測色により自分の歯の色を理解させる方法は、自分の歯に感心を持たせ、歯を大切にさせる上で極めて効果的であるのみならず、歯に対する知識をもっと得たいとの探求心を高める上でも有効である。